

民児協だより



— 支えあう 住みよい社会 地域から —



まなざし

開成町民児協では、毎年度「ふれあい交流会」を開催しています。約150名の高齢者や障がいのある方等をお招きし、町内の保育園やボランティアグループの協力を得て盛大に開催しています。

この取り組みは、30年程前に当時の民児協の活動であった、煮物などのお惣菜をひと皿持ち寄って、地域の高齢者をもてなしていた「ひと皿サービス」が前身となっています。

当時の民生委員・児童委員の“おもてなし”の気持ちが、昼食会と交流の場となって、今もなお脈々と引き継がれています。

近年、少子高齢化や地縁関係の希薄化がすすむ中で、高齢者や障がいのある方、子育て家庭が抱える課題は多様化しています。町民児協では、様々な課題に対応するための学習会等を行い、地域住民の支えとなれるよう自己研鑽を積み重ねています。

(開成町民生委員児童委員協議会)

特集 チームで支える住民の生活 みんなで支えあうチーム活動 (小田原市酒匂12区きずなチーム)

- 活動研究レポート(秦野市民児協広報部会)
- NEWS&インフォメーション(関東ブロック会議・全国主任児童委員研修会)
- 通信員だより

特集

チームで支える住民の生活
みんなであつチーム活動

住民の困りごとを解決しようとして一致団結して取り組む酒匂12区きずなチーム。自治会やボランティア、老人会などと一緒に活動するこのチームは、民生委員・児童委員にとつて頼もしい存在です。地域の特性や強み、地域の力を活かしたきずなチームの取り組みを紹介します。



古きよきつながらが
助け合いの仕組みに

酒匂地区は小田原市を流れる酒匂川の東に位置し、酒匂12区は南

は海岸、北は東海道線に挟まれた、高齢者が特に多い地域です。自治会加入世帯は435世帯。総世帯数の

約80%が加入しています。民生委員・児童委員（以下、委員）の五十嵐さんと海野さんが、地区を2つに分けて活動しています。

酒匂12区は、昔は田んぼしかない地域でした。それが、徐々に人口が増え、子ども会ができ、青年会ができ、そして敬老会ができと、少しずつできる範囲の地道な活動を続けていくなかで、自然にお互いさまの助け合いが生まれました。現在では、小田原市社協が推進

気付き、見守り、支え合う
「きずなチーム」

している「きずなチーム」の仕組みと融合して活動しています。古きよきつながらがある地区の強みを活かして、仕組み化しているところが意義深いところです。

「きずなチーム」とは、地域の要支援者に対して、住民が無理のない範囲で見守りや支援活動をしていくため、自治会や委員の担当エリアなどを範囲に設置された見守り支援チームです。市内には26のチームがあり、地域特性に合わせた活動を展開しています。

酒匂12区きずなチームは、自治会長の深田さんを中心に、自治会役員、公民館長、自治会のプロック長、小田原市社協のきずなボラ

「ちょっと聞いてみるね」の
一言が安心と信頼に

ンティア、地区のボランティア、老人クラブの皆さん、そして委員の、総勢33名で構成され、30代〜80代と幅広い年齢の方々が活躍しています。

きずなチームの活動は、メンバーの「昔とつた杵柄」を活かした、障子貼りや除草・草取り、窓拭きやゴミ出し、樹木の伐採・剪定・枝落とし、古新聞搬出や家財片付け、交通整理、防災倉庫の土台モルタル工事など、住民の困りごとに対応できる範囲で応えています。

メンバのなかには、電気技術や施工を本業としていた人もいます。相談の約8割は、委員が訪問活動中に耳にした住民の困りごとです。



一つひとつ必要なものかを一緒に確認しながら片づけします。

例えば、ある高齢の女性から、「家の片づけが一人ではできない」と相談がありました。委員はすぐに、きずなチームに相談しました。メンバー数名で2〜3回かけて、家財の片付けをしました。間もなくして女性は亡くなりました。葬儀にメンバーが弔問したところ、女性の娘さんがとても感謝してくれたそうです。「母は終活のつもりだったと思う。母の願いを叶えてくださってありがとうございます」と。

「ずっと閉め切っていた窓が固まって開かなくなりました」と相談を受けたときは、メンバーがお宅に訪問して状態を確認しました。その時は、素人ではとても対応できないものだったので、た

またま知っていたその家を建てた大工に連絡してつないだそうです。このように、住民から受ける相談のなかには、対応が難しいこともあります。



剪定が得意なメンバーが力を発揮しています。

そのような時には、自分たちでできるかできないかを判断し、できることはチームの力を合わせて行い、できないことに対しては対応を考え、解決への道筋をつける。ところまで、きずなチームは関わってくれるとのことでした。

そのような頼りになる地域の仲間がいるということは、委員にとつては心強いことであるし、住民との信頼関係にもつながります。

委員の五十嵐さんと海野さんは、住民から相談を受けたときに「ちょっと聞いてみるね」と言えることができ、とても助かっていると言います。

**「きずなチーム」から学ぶ
地域づくりに大切なこと**

委員ときずなチームは、お互いに連携し、協力し合って、さまざまな活動を行っています。

例えば一人暮らし高齢者に配るものがあると、きずなチームと一緒に配ります。また、自治会のイベントなどには、きずなチームみんなで協力します。

委員の活動には、委員だからこそできることがある一方、できることには限界もあります。そのことを理解してもらいつつ、地域の協力を得て、「みんなで助け合う地域づくり」を実現するために、委員自らが色々な機会を捉え、地



できることをできる範囲で協力して助け合いの活動をしています。

**無理なく楽しく
仲間のすそ野を広げよう**

さらに活動を充実し継続していくためには、今活躍している方に

続ける人材を発掘することが課題です。そこで、きずなチームの皆さんは、青年会の方々と地元で捕れたアジを味わうアジパーティーや、公民館長の山で採れただけのこを振る舞うパーティーを開いて、若い人たちとの横のつながりをつくっています。そのお話をしながら、楽しそうに笑顔があふれ、今度はカラオケパーティーをしようと盛り上がる様子も印象的でした。

人材を増やすことは課題ですが、楽しいことを共有することで仲間づくりをしていこうという雰囲気、きずなチームの今後の広がりがさらに楽しみになりました。

**活動の源は同じ「志」で
手を差し伸べること**

きずなチームの活動は、ゴミ出し一つとっても、それが継続することで、住民と親しくなり、見守りにつながり、どのような人がど

こに暮らしているかも把握でき、地域のつながりが広がっているように感じました。

「住民から『困っている』と声が上がったときに、同じ「志」を持ったメンバーが何の名譽もなく、ひたすら困っている方の手を差し伸べる、これが活動の源です」この一言に尽きると深田さんは言います。さらに、「住んでいる人が楽しく生活できるように、これからも目標を一つにして楽しく活動していきます」と、力強くお話されました。

(広報委員 宇田川敏枝、邊見千恵)



酒匂 12 区きずなチームの皆さん。左上から、海野さん、梶塚さん、小川さん、五十嵐さん。左下から、石黒さん、深田さん、大川さん。

市町村民児協発
活動研究レポート
No.41

自分たちの活動を自分たちで表現する意義
秦野市民児協広報紙づくりから見えるもの

秦野市民児協は12地区260名からなり、各地区から選出された12名と担当会長の計13名で広報部会が構成されています。取材を通して「広報紙をつくる過程は、学び、気付き、情報共有、モチベーションアップにつながっている」ことが見えてきました。



広報部会は、ベテランから新任

まで幅広い経験年数の民生委員・児童委員で構成されていますが、皆さんのモチベーションの高さと、新聞社顔負けの取材や校正に取り組む真剣な姿に感動しました。

940部発行し、委員全員の他自治会

長や公民館などに配布しています。各地区の活動を知ること、自分の地区でもやってみようという、



A4版4頁で作られています。「特集」「地区活動の様子」「関係機関からの情報提供」で構成されています。

今の活動を将来に渡って残していく

広報紙の発行を始めたのは昭和62年。民生委員制度創設70周年を契機に、「活動を将来に渡って残していこう」という思いからでした。以来約30年間の積み上げは、委員活動の歴史として貴重な財産になっています。

モットーは「良い広報は読まれる広報」

広報紙『まなざし』は年3回各

意欲喚起につながるの思いから、読ませたい内容ではなく、読者が「読みたいくなる内容」を意識してつくっています。

部長の金岡さんは「一人に見ても

らうのに恥ずかしくないものをつくると同時に、執筆者の思いも大切に自分たちも満足する広報紙をつくりたい」と言います。

昨年度から全ページをカラーに変更し、写真や図を効果的に活用して、より読みやすさを心掛けています。その結果、ファイリングをして手元に残す委員が増えました。各地区の定例会では、広報部員が読んでほしいポイントを口頭で委員に伝え、より関心を持ってもらえるような工夫もしています。

広報紙をつくるためのちょっとした工夫のポイント

広報紙を1号発行するまでに、4回の広報部会を開催します。内容や執筆者を選定する企画から始まり、原稿の読み合わせと修正を繰り返して編集したあと、印刷校

正を経て発行に至ります。

なかでも、一番頭を悩ませるのは企画です。関心が高い内容は何か、いつ広報紙に載せると効果的に情報が



原稿は一言一句丁寧に読み合わせをします。

情報共有や学びの場としての広報部会

広報部会では、各地区の情報共有の時間も大切に行っています。例えば、末広地区で行われた救命入門コース講習会の記事の校正をきっかけに、消防本部と市役所で行う講習会の違いや、高齢の委員でも体力に配慮しながら受講できる講習方法について、情報交換

が伝わるか、などを考慮しています。編集が早く進んだ時には、前倒して企画を考えることもあります。また、部長が前もって紙面計画を組んでくれるため、広報部員は早め地区会長へ記事の内容を相談ができるようになりました。ちょっとした工夫や気遣いで、よりスムーズな運営ができています。

をしました。

隣の地区の活動を知ることができ
るのはもちろん、自分の地区の
良いところに気付くきっかけにも
なっています。新任委員である広
報部員は、「部会で活動すること
で、委員の活動内容や楽しさがわ
かってきた」と言います。

広報紙のちから

東地区では、山々がそびえたつ
環境を生かして、農家が野菜を提
供し、子どもたちがつくった米を
使って、婦人会などが食事をつく
り、委員が配食する活動を行って
います。その頑張りや苦勞を紹介
したところ、記事を読んだ自治会
の方は、「うちの地区には優しい
子が多いね」と、以前にも増して
その取組みを誇りに感じ、感謝し
てくださったそうです。『まなざ
し』に掲載されたことで、さらに
連携が深まり、あらためて「広報
紙のちから」を感じたそうです。

自分たちの活動を自分たちで 表現できるように

「自分たちの活動を自分たちで
表現することが大切」というお話

が印象的でした。「活動内容や思
いを、意識的に文字にすることで
見えてくるものが必ずある」だか
らこそ「文章を書くときは、絵手
紙のように心を込めて書きます」。
このような思いで、広報部員の皆
さんは活動しています。

金岡さんは、「現場をじつじ
り見て考えたことを紙面にする、

『攻めの広
報活動』が
目標」と力
説します。

地域の活動
にくまなく
目が行き届
き、委員の
疑問や戸惑
いなどもわ
かりやすく
紹介する『ま
なざし』。そ
れでも現状
に満足する
ことなく、
高みを目指
すリーダーと
ともに、広報
部員は学び
を楽しみなが
ら、思いを込
めて執筆しま
す。

(広報委員 大沢みき、金子明)



秦野市民児協広報部会の皆さまと県民児協の広報委員。
広報に携わる仲間として多くの学びがありました。

活動のヒント・ポイント

記憶と記録に残る 広報誌を！

泉恵造研修企画工房
代表社員
泉 恵造さん



小説に“起承転結”があるように、広報紙にも“起承転結”があります。
ただし広報紙の場合は“PDCA”と呼んでいます。

P(Plan企画) 広報ニーズを見つける

紙面を充実させるためには、『この広報紙を何の役に立てるのか、今何が求められているのか』といった、いわゆる広報ニーズを把握する必要があります。広報紙『まなざし』は、そのニーズを的確に捉えた企画を立案されています。

D(Do制作) アウトプットは磨き上げて

情報にはインプットとアウトプットがあります。研修会等に参加するのは、まさにインプット。自分の中に情報を蓄えることですが、蓄えた情報を外に広げるのがアウトプットです。その際に必要なのは、情報をどれだけ磨き上げられるかということ。広報紙は記録であると同時に、鮮やかな印象を伴う記憶としても残ってほしいものです。

C(Checkチェック)、A(Action再制作)

チェックこそ、よりよい再制作のステップ

広報紙が完成したら、それでおしまいではありません。読者側にしっかりと伝わっているのか、どういった変化が生じているのか、といったことを敏感に把握し、次のステップへとつなげていくことが大切です。今後、より一層、読者との双方向性を深めるために、電子メールやSNSといった媒体を活用したり、将来にわたっては、紙面をインターネットに公開するというような可能性が追求できるといってもいいかもしれません。

大切なのは、情報の発信者と読者が一本の糸でつながること。それが広報紙という媒体で実現できれば素晴らしいと思います。

NEWS&インフラオレーション

第78回関東ブロック民生委員
児童委員活動研究協議会

6月26日(火)～27日(水)の2日間、甲府富士屋ホテル(山梨県甲府市)において1都10県8政令市を代表して328名の方が参加し開催されました。

第1日目は、認定こども園「和泉愛児園」の皆さんによる和太鼓演奏がほほえましく、オープニングを盛り上げていただきました。

開会に先立ち、信条と児童憲章の朗読にはじまり、新潟県から前年度報告、全社協から情勢報告、次回開催地の川崎市のあいさつがあり、蕪崎

市・北斗市委員の皆さんとの「花咲く郷土」斉唱が行われました。

記念講演では「フードバンク活動から見える子ども



うテーマで、認定NPO法人フードバンク山梨の米山けい子氏からお話がありました。

内容は、フードバンク山梨のはじまり、取り組み、市民参加のフードドライブ(一般家庭の食品を寄付し、寄付された食品を福祉施設や困窮世帯に提供する活動)です。マザーテレサの「日本人はインドのことよりも、日本の中で貧しい人々への配慮を優先して考えるべきです。愛はまず手近なところからはじまります」という言葉に感銘を受けました。

また、映像にて利用者の声を拝聴しました。母親と子どもが、食料がたくさん詰まった箱を開けるときの、子どもの喜ぶ顔がとても良かったです。最後に賛同から参加のご協力をお願いします、と呼びかけがありました。

第2日目は、4つの分科会に分かれての協議です。第一分科会では、海老名市民児協から、地域版「活動強化方策」の策定に向けての実践報告がありました。市民児協では、会長から役員に対し、地



桐生会長から海老名市民児協の活動強化方策の紹介

域に即した「活動強化方策」の作成の必要性を呼びかけました。私たちに求められていることは何か、まためざすものは何かを、お互いに学びあい共通理解を図ったこと、独自のモットー「凡事徹底」「和顔愛語」を方策に取り入れたことなどの報告を聞き、それぞれの地域にあった方策の策定ができれば良いと思いました。コーディネーターの金井敏先生より、「地域連携の一つの形として、目標を関係機関で共有することがあげられる。われわれ民児協はこういうことをやっているという発信こそが、活動強化方策になっていく」ということを学びあう機会となりました。

(二宮町民児協会 野谷美恵子)

民生委員・児童委員の「ありがとうのエピソード」募集!

いつも『県民児協だより』をお読みいただき、ありがとうございます。
今回、読者である民生委員・児童委員の皆さんの声を募集します。
日々の活動のなかで「ありがとう」と言われてうれしかったエピソードや、やりがいを感じたエピソードなど、民生委員・児童委員で共有したい

ことを教えてください!
お寄せいただいた声は、『県民児協だより』で紹介したり、インタビューをさせていただきたいと思います。
メール、ファクシミリ、郵送で受け付けます。字数は問いません。
お気軽にお寄せください。

【投稿先】
神奈川県民生委員児童委員協議会

●Eメール kmjk@knsyk.jp ●FAX 045-314-3472
〒221-0844 横浜市神奈川区沢渡 4-2

全国主任児童委員研修会
「子育てを応援する地域を
つくるために」

7月25日(水)～26日(木)、新横浜プリンスホテルに267名が集まり、「全国主任児童委員研修会」が開催されました。神奈川県からも、6名の主任児童委員が参加し、有意義な時間を過ごしました。

1日目の行政説明では、厚労省子育て支援課の依田専門官から、人と人とのつながり、他機関や民生委員・児童委員(以下、委員)とのつながりなど、主任児童委員は「結び目の役割」として期待しているという話がありました。

また、明治学院大学の松原学長の講演では、活動の中で大切にしたいこととして、「見守る眼」「深く聴く耳」「支える手」「寄り添う気持ち」があげられました。そして、子どもの貧困や非行、虐待などの課題に対しては、「こんなものがあつたらいいね」と前向きに活動を続けてほしいとの呼びかけがありました。

シンポジウムでは、藤沢市片瀬地区の主任児童委員である松本真理子さんが実践報告をされました。子育て中のお母さんからの「毎日

集まれる場所が欲しい」という声から立ち上げた、妊婦さんから3歳までの子とその親を対象とした居場所についてです。季節のイベントや、保健師や臨床心理士、保育士を招いた専門講座などを行っています。中学校に出張して開催することもあり、休み時間には中学生が赤ちゃんたちに会いに来てくれるそうです。

他にも、児童健全育成推進財団の阿南さんから児童館の取り組みの紹介と、「子どもに地域で良い思いをさせてあげてほしい。地域での生活が幸せと感ぜられる優しいメッセージを伝えてあげてほしい」との話がありました。今何ができるのか考えるヒントになった」と、参加した方は言います。

また、社会福祉法人大洋社の斎藤さんからは、母子生活支援施設の機能を活用した、学習支援や就業支援、体験実習や調理実習などの取り組みの紹介があり、「福祉施設も活用してほしい。子どもたちが生きていく力を共に育んでいきましょう」と、心強い言葉をいただきました。

2日目は、分散会で「全国児童委員活動強化推進方策の具体的展

開に向けて」をテーマに、それぞれ意見交換を行いました。

今回参加した皆さんからは、普段は地区に数名しかいない主任児童委員ですが、同じ想いを持っている仲間が日本中にいることが励みになったとの感想がありました。また、いつも行っている学校や幼稚園・保育園との情報交換や、委員と主任児童委員の意見交換がどれほど大切かということも、改めて感じたという方もいらっしゃいました。

「良いと思ったら、できる範囲でやってみる、声をかけてみる、他機関に話をしてみる」といったちょっとしたことが、子育てを応援する地域づくりにつながります。そしてそれを目指している仲間、全国にたくさんいることが、何より頼もしく感じた2日間でした。



参加者の大島さん、関口さん、飯野さん、内田さん、足立さん、廣瀬さん、記事執筆にご協力いただきありがとうございました。

編集雑感



広報委員をお受けして、6回目の『県民協だより』の発行になりました。読む側、見る側の立場になって、表紙の「まなざし」から「特集」「トピックス」「通信員だより」まで、率直な意見交換をしながら紙面づくりを行っていきます。前回の134号より、8面を縦3段のレイアウトに変更しましたが、いかがでしたか？

また、一人ではできない様々な事を、地域の皆さんと連携して活動を通じて得ることのできる情報は、広報紙を作るうえで私の大きなエネルギー源になっています。これからも皆さんと一緒に、一人ひとりの心に届く身近な広報紙づくりを目指し、そして今後の自身の活動にも活かしていけたらと思います。

(広報委員 大原すずか)

通信員だより

藤沢市

毎年恒例の藤沢市民児協 独自の全地区研修会

通信員 竹内規之

今年度の全地区研修会は会長が手作り研修会を掲げ、行政・市社協の協力で開催されました。

第1部、行政は委員へのアンケート結果をもとにした委員との協力体制・負担軽減の検討内容を、市社協は「コミュニケーション・シャルワーカー」の取り組みを報告しました。

第2部は、市民児協独自の指定民児協2地区2年間の報告です。遠藤地区は、慶応義塾大学湘南藤沢キャンパスの学生と「食」を通じた交流を地域交流イベントまで広げた実践を報告しました。交流を続けるために他団体事業への参加・協力という「面」で接していく大切さを共有しました。辻堂西地区からは、日赤指導員からの高齢者の生活支援・認知症・救急法・心肺蘇生研修や、聴き上手・話し上手（好かれる人）を目指した心理相談員の傾聴研修（講義・演習・ライブプレイ）を報告しました。

第3部は、各地区会長が民生委員・児童委員に共通して必要な情報をまとめた資料集を1項目ずつ読み上げ、民生委員・児童委員の更なる意識向上を図りました。踊りのアトラクションもあり、見聞を広める研修の大切さを実感した全地区研修会でした。



藤沢市民生委員・児童委員全地区研修会

手作り研修だからこそ踊りで和やかに

海老名市

永年の社会奉仕活動 ～厚生労働大臣から表彰状～

通信員 倉橋郁子

平成29年11月22日
メルパルクホールで、
全国社会福祉大会が
開催されました。

この大会で、多年に
わたり社会奉仕活動
を続けている中部地
区民生委員児童委員
協議会（桐生行雄会
長）に対して、厚生労
働大臣から表彰状が贈られました。



先達たちから受け継がれてきた社会奉仕活動の思いが込められている表彰状を手にして

この活動は、約15年前から毎月市内の老人ホームにおいて、入所者の洗濯物たたみと収納、床やエアコンフィルターの清掃を行い、作業終了後、入所者のみなさんと一緒に懐かしい歌を歌ったり、おしゃべりをしたり、などの活動を行っています。

老人ホームからは、「人手不足や施設の密室化を防ぐ面で大変助かります」と、声をかけてくださいます。職員にとっても「自分たちもがんばらなければ」と触発され、励みになっているとのこと。このように、永年に亘り、共に支え合う地域社会づくりに貢献していることが評価されました。

今後先達たちの思いを受け継いで活動されることと思います。

（執筆協力）海老名市中部地区

民生委員・児童委員 原田剛司

真鶴町

子育て支援の拠点 まなっこひろば

通信員 佐藤 又左衛門

真鶴町、真鶴町民児協と社会福祉協議会が連携して運営する「まなっこひろば」が開設されてから6年が経過しました。0歳から小学校入学前までの乳幼児と保護者が気軽に集い、子育ての不安や悩みを相談したり、仲間作りを支援する場として利用され、定着しています。オモチャや絵本を揃え、月曜日を除く午前と午後に開放し、水木曜日には保育士も来てくれています。

毎月開催される「お誕生会」では、主任児童委員が主導する、手遊び歌・絵本の読み聞かせなど、顔写真つきの手形・足形を記念にプレゼントしています。12月はクリスマス会を行います。

また、年間イベントとして、各2回、子育て支援講座や、子ども服やマタニティウェアのリサイクル品を必要の方に無料でお渡しする「まなっこひろばリサイクルフェア」を開催しています。

真鶴町民児協は、地域の子どもたちの成長を願い、子どもは町の宝だとの心で、これからも支援活動を続けていくつもりです。



「これなあに？」と絵本を指さす子どもたち